

「ともに食べ、飲むこと」：
ワインの社会文化的機能と Perfectos
desconocidos の翻訳可能性

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2024-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大原, 志麻 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000316

「ともに食べ、飲むこと」：ワインの社会文化的機能と *Perfectos desconocidos* の翻訳可能性

大原志麻

1. はじめに

人間は料理をする唯一の動物で、料理により食文化が生まれ、食事をするようになった。他人と同じ食卓につくことは、単に栄養を摂取するための行為とは異なる文化的行動である。ヨーロッパ文化における共食ではワインが欠かせない。ワインによる酩酊状態での不安や緊張の緩和は人間関係における潤滑剤となり、また非日常的行動を誘発することから、祝祭、行事、宗教的な祝い事にはアルコール飲料が不可欠であった。飲酒行動の友情をふかめ、連帯を強化し、社会的孤立を解消するといった社会的効果の認識は、飲酒文化のある文化圏共通のものである¹。ワインはギリシア・ローマ文化において主神ともなり、『饗宴』の原題であるシュンポシオン (Symposion) は「ワインを飲む者の集まり」を意味し、プルタルコスが「(ワインなしの) 会話は、ワインのなかにあれば友情や教養や魂までも容易に動かせる成分を、体から遠ざけてしまう」と会話に必要なものとし²、ギリシア人の世界観が生まれる場の中心ともなった³。ヨーロッパにおける宴 (convivium) は人と人、人と集団、さらには集団同士の関係の形成を促進し、ときには変容させる役割を担っていた。共食からはやがて規範が生まれ、ローマ時代には食事において既にフルコースの基本形が出来上がり、中世に入ると現代のフルコース料理の基礎が確立し、テーブルマナーが定められた。宴はコミュニケーションの場であることに加え、社会的ステータスと関連し、食事をする場やテーブルマナーなどにより宴の主権者や招待客の文化的優位が強調されるようになった。

本論ではヨーロッパの飲酒文化及び宴の歴史的位相を基に、宴とワインが人

¹ 石毛直道編『論集 酒と飲酒の文化』、平凡社、1998年、58頁。

² ジャン＝ロベール・ピット (幸田礼雅訳)『ワインの世界史』原書房、2012年、75頁。

³ マグロンヌ・トゥーサン＝サマ (玉村豊男監訳)『世界食物百科』原書房、1998年、274頁。

間関係の構築にどのように寄与していたかを析出し、饗宴文学⁴の系列上にある饗宴映画の代表作ともいえる『大人の事情』(Perfetti Sconosciuti) とそのリメイクにおいて、ヨーロッパ文化の基層となる宴の社会的文化的機能が継承されているかについて考察する。物語の中心に食事風景を据え、ワインを片手に前菜で話題を提示し、メイン料理にかけて話題を展開し、デザートで締めくくるといったコース料理をベースとした構成の映画は、ヨーロッパでは定番である。ここでは世界30カ国でリメイクされている『おとなの事情』に着目し、ヨーロッパ文化の普遍性の翻訳可能性について検討する。

2. 宴のコース料理による物語の展開

ギリシアの都市国家では「公的宴会を組織し提供することが、すべての政治家にとって、避けては通れない義務」⁵であり、地中海世界で蓄積され継承されたローマ時代の文化の総体とされるペトロニウスの『トリマルキオの饗宴』⁶にみられるように、毎日のように催される宴は、食材から自らの所有地の広さを知らしめし、関係性の遠い人間も参加するなど人脈を広げる格好の機会でもあった。中世ヨーロッパにおける集団生活でも会食、宴会は核心的な役割を果たした。中世人の非・言語コミュニケーションのうちでも会食・宴会 (convivium) は、下された決定や、行われるべき改革、変化を知らせるための主要なサインのひとつであり、平和と協調の上に立った関係を、否応なく表現させるための手段だった⁷。宴はきわめて象徴性の高い行為で、祝宴において席を同じくすることは、双方の平和的友好関係と、将来にわたりこれを維持していくという固い決意を公にするものに他ならない⁸。洗礼、婚礼、騎士叙任、葬礼⁹、封土讓

⁴ シュンポジオンは、和訳ではシンポジウムとして社会・政治問題の討論会のように変訳されているが、当時は、食事をすませた後で長椅子に寝そべり、ワインを飲みながら高尚な議論を愉しむもので、知識人たちの飲酒・食事の方法と内容、多岐多様な話題に及んだ。プラトン『饗宴』、クセノフォン『饗宴』、アテナイオス『饗宴』、プルタルコス『食卓談集』では、宴における哲学的会話、料理や食材、珍奇な料理や希少な食材、銘酒や酒の飲み方、文学、哲学、法律、医学などにまたがる饗宴での広範な話題がまとめられており、食文化の集大成となる文学的なジャンルである。

⁵ ジャン＝ルイ・フランソワ・マッシモ・モンタナリー (宮原信、北代美和子 監訳)『食の歴史』I、藤原書店、2006年、207頁。

⁶ 青柳正規『トリマルキオの饗宴—逸楽と飽食のローマ文化』中央公論社、1997年。

⁷ ジャン＝ルイ・フランソワ・マッシモ・モンタナリー、前掲書、388-392頁。

⁸ ゲルト・アルトホフ (柳井尚子訳)『中世人と権力』八坂書房、2004年、110頁。

⁹ 葬礼の宴は故人の共同体の中での存在感のインパクトを示し、また残されたグループの結束を固

渡、重要な決定といった新しい事態を目に見える形で表すときに、宴は新たな絆の創設、旧来からの絆の確認と認められる。この種の友誼的なつながりは中世社会のあらゆる階層に見られ、意思決定はしばしば共同体の催すコンヴィヴィウムの席で行われた¹⁰。

映画における饗宴をみていくと、2000年の『宮廷料理人ヴァテル』(Vatel)¹¹では、謀反を許されてフランスに帰国したものの、老いて落ちぶれたコンデ公ルイ2世が、ルイ14世の信頼を再び勝ち取り、仏蘭戦争での指揮権を得ることを期待して1671年4月にヴァテルに三日三晩の饗宴を依頼するという、政治権力にアクセスするために宴が開かれる設定となっている。コンデ家の命運をかけた宴が進むにつれ、オランダとの講和への否定的要素が並べられ、戦争へと向かいコンデ公の存在感が高まる。

『バベットの晩餐会』¹²は、1958年に出版された中編小説 *Babettes gæstebud* を翻案して製作された、1987年アカデミー賞最優秀外国語映画賞、日本でも公開した年のトップの映画である饗宴映画の傑作である。鄙びて停滞した禁欲的でプロテスタントのデンマークが舞台で、そこにパリの贅沢三昧で、カトリックの波乱に満ちたフランスという外来文化の衝撃が入り込み、そこでは対立命題を成すプロテスタントとカトリック、西ヨーロッパと北欧の二つの料理体系が看取できる¹³。北欧型の貧しさ、中世から変わらない食生活、身分の上下による明確な文化の対決が、「粥に入れる塩もない人たち」と「ビール粥だけ食べて一生を終えることはできない」ローレンス・レーヴェンイエルク将軍が出された食物を嚙下できずむせるシーンから、階層の違いによる異なる食物、うまくいかない恋、異なる身分の男女の恋愛の難しさが表されている。カトリックのバベットは大きな十字架を首からかけており、マチヌ（マルティン・ルター）とフィリパ（フィリップ・メランヒトン）の姉妹は、カトリックの人間が家にいること、宝くじに当たって1万フランも持っている人間への恐怖を抱き、信者を魔女の饗宴に招いたことを悔い、詫げる。ワインにはなじみがなく、「それはワインね」といったあと悪夢の中に真っ赤なワインが出てくる。北欧人には

め、貧者や病人に食べ物や酒を施す宗教的な意味合いがあり、必ずパンとワインが供され、聖俗の人間が食卓を共にした。Tascón González, M.M., *Alimenticios en la España medieval (siglos VIII-XV). Los reinos de León y Castilla*, Tesis doctoral, Universidad de León, 2011, pp. 626-632.

¹⁰ ゲルト・アルトホフ（柳井尚子訳）『中世人と権力』八坂書房、2004年、90頁。

¹¹ Roland Joffé, *Vatel*, Gaumont Buena Vista International, 2000.

¹² Gabriel Axel, *Babettes gæstebud*, Det Danske Filminstitut Nordisk Film Rungstedlundfonden, 1987.

¹³ ベアトリス・フィンク（石田靖夫訳）「言語としての食べ物—「バベットの晩餐会」における言説とアレゴリー—」『思想』（835）、1994年、113-125頁、113-125頁。

食べ物と認識されないものがサーブされ、魂が危険にさらされる。信者は全員が食べ物と飲み物の話題を口にせず、味覚がないかのように振舞う。神への忠誠を誓いあい、舌は神を称えるためにあるが、食事を楽しむ毒の塊である悪い側面があるとして、ワインと食事の堪能を拒否する。

『バベットの晩餐会』は、古代からの饗宴文学のジャンルに属し、シュンポシオンの媒介変数はバベットの食事の中にも見出され¹⁴、映画では古典古代の饗宴からキリスト教的な晩餐へ移行する。将軍は料理や酒の名前を次々に言い当てては舌鼓を打ち、信者たちは将軍の話聞き流すなど、かみ合わない会話は食文化の違いと並行する。将軍は北欧の人だがパリに住んでいたことがあり、また上流階級の食事はフランス料理である。信者たちは将軍のテーブルマナーを模倣しながら食事をする。晩餐が進み、ワインをおかわりするにつれ支離滅裂な会話が滑らかになり、建前と本音の隔たりがほぐれていく。信者たちは歳をとるにつれ徐々に気難しくなり、過去の出来事を繰り返して互いに攻め合い、集会在諍いの場となっていたが、食事とワインの力で神と牧師に感謝しつつ思いつき出話をし、口論の種となった出来事を反省し、互いに和解し始める。原作が書かれたのが1958年の冷戦期で、映画化が1987年でEU統合へと向かう時期だったことから、映画ではプロテスタントとカトリックの両体共存と実体変化が再び一つとなる¹⁵。レーヴェンイエム将軍の「肉体的欲求と精神的欲求の区別がつかなくなる愛」を食事が表現し、芸術的な料理により、心が解き放たれ鎧が脱ぎ捨てられる。若いころ本当に言うべき言葉は「私は今後生きている限り、いつもあなたのそばにいる」だったが、いうべきだった言葉をいわなかったので、人生を無駄にしたことを受け入れることができる。このように現代の映画においても宴 (convivium) が政治的権力へのアクセスする手段としてとらえられ、そしてアルコール飲料が潤滑油となり、食卓が融和、承認、協調と平和の表象するところは揺るぎない。

3. ワインの社会文化的機能

ワインはプリニウスが「大地の血」と述べているようにヨーロッパの食料とも飲料ともなる基本的な糧である。古代より文明の象徴としてギリシアとロー

¹⁴ ベアトリス・フィンク (石田靖夫訳)、前掲論文、119頁。

¹⁵ ベアトリス・フィンク (石田靖夫訳)、前掲論文、123頁。

マの価値観を結びつけ、旧約聖書でも新約聖書でも頻繁に言及され¹⁶、キリスト教ヨーロッパではパンと同様に「キリストの血」として聖性がある至高の飲み物である¹⁷。初期のヨーロッパでは地中海地域のワインを飲む人々はビールを飲む人々に対して、「真の信仰」の力を強化し、ワインは、政治、文化的な正当化の手段として中心的な役割を果たしてきた¹⁸。ワインによる飲酒文化が成熟しているヨーロッパにおいて、ワインは社会的関係、社会的結合や情報共有の場の中心で、媒介、結びつきの役割を担い、はやくから飲酒と酩酊に関する価値観と社会的行動規範が確立された¹⁹。



図1 カナの婚礼（15世紀後半）²⁰

¹⁶ Vermeyleen, A., “El vino en la Biblia”, *Simposio Internacional “El vino en la literatura española medieval, presencia y simbolismo”*, Mendoza, Argentina: La Facultad de la Universidad de Cuyo, 1990, pp. 31-46.

¹⁷ Pérez Samper, M.A., *Comer y beber. Una alimentación en España*, Cátedra, 2021, p. 39.

¹⁸ ジャック・グッディ（山内彰／西川隆訳）『食物と愛』法政大学出版局、2005年、252頁。

¹⁹ Rodrigo-Estevan, M.L., *op.cit.*, p. 122.

²⁰ Retablo de San Salvador, de Blasco de Grañén y Martín de Soria, 1454-1476.

Parroquial de Ejea de los Caballeros, Zaragoza. Foto: Lapeña. Citado en Rodrigo-Estevan, M.L., “El consumo de vino en la baja Edad Media: consideraciones socioculturales”, (coords. M. García Guatas, E. Piedrafita y J. Barbacil), *La alimentación en la Corona de Aragón (siglos XIV-XV)*, Institución Fernando el Católico, 2013, pp. 101-134, p. 125.

ヨーロッパ世界、特に地中海世界では共同体の連帯を強める誕生、洗礼、戴冠²¹、婚礼²²、葬礼²³といった儀礼や宗教的な祝祭²⁴、同盟、個人的な契約の際の宴においてワインは主役である²⁵。例えば、11世紀のアラゴン地方農村社会では、土地の売買契約締結時にワインは不可欠で、サン・アンドレス・デ・ファンロ修道院の食堂(refectorium)でパンとワインとが十分に振舞われた宴(alifala/aliala)についての記述があり、土地売買文書の確認に際して、共同饗食行為の慣行があった²⁶。「食べることと、飲むこと」の規範について、12世紀ルネサンス期以降、少しずつ公の場での飲食に関する食事作法書がまとめられるようになった。13世紀に遡ることができるReinerus Alemannicusの*Phagifagetus*には、ワインについて「飲み物とワイン」「猷酌侍従の役割」「ワインの危険性」「主人の前でどのように飲むべきか」「友達の前でどのように飲むべきか」「ワインを飲む前に口をきれいにしなければならない」などの項目があり²⁷、テーブルマナーにおけるワインに関する示唆が重要な項目とされている。

コンヴィヴィウムに対して教会から向けられた、会食の結果としての酩酊へ

²¹ 「フェルナンド王はサラゴサでタラゴナ大司教の手で塗油され、戴冠し、聖別された(中略)祝宴は10日続き(中略)毎日一方には赤ワインをもう一方には白ワインがふんだんに供された」*La alimentación en la Corona de Aragón (siglos XIV-XV)*, op.cit., p. 12.

²² Sarasa Sánchez, E., “La mesa del rey: Fernando I de Aragón (1412-1416)” (coords. M. García Guatas, E. Piedrafita y J. Barbacil), *La alimentación en la Corona de Aragón (siglos XIV-XV)*, Institución Fernando el Católico, 2013, pp. 11-20.『フアン2世年代記』にはフェルナンド1世はカリネナ、コンガレスとモロスの赤ワインを飲み、ペドロ4世の三番目の王妃シビラ・デ・フォルティア、マルティン1世の最初の王妃マリア・デ・ルナの戴冠の後は宴が催された。またナバラ王女とアラゴン王フアン2世の婚礼においてアロ伯ペドロ・デ・ベラスコが「食べ、飲むものを」を整え、豊富なワインが準備されたと記されている。『ジョアン2世年代記』には稀にみる盛大な宴であるジョアン2世の王太子であるアルフォンソとカトリック両王の長女イサベルの婚礼において王、女王、王子、王女が公の場で大いにワインを飲んだとある。Tavares Maleval, M.A., “Banquetes de reis e do rei en algunha prosa e teatro medievos”, *Abril: Revista do Núcleo de Estudos de Literatura Portuguesa e Africana da UFF*, Vol. 6, n° 12, 2014, págs. 37-52, p. 44.

²³ Sánchez Sánchez, X.M., “Los banquetes funerarios en la Galicia Medieval: mentalidad, sociedad y pervivencia en las fiestas de la muerte”, *Espacio, tiempo y forma. Serie III, Historia medieval*, N° 36, 2023, págs. 1169-1208.

²⁴ Tascón González, M.M., op.cit., p. 617. 1461年ハエンで公現祭にルーカス・デ・イランソが饗宴を数日にわたって催し、多くのワインが豪華な食事とともに供された。

²⁵ Rodrigo-Estevan, M.L., “El consumo de vino en la baja Edad Media: consideraciones socioculturales”, (coords. M. García Guatas, E. Piedrafita y J. Barbacil), *La alimentación en la Corona de Aragón (siglos XIV-XV)*, Institución Fernando el Católico, 2013, pp. 101-134, p. 116.

²⁶ 足立孝「宴(アリアラ)と11世紀アラゴン地方農村社会—土地売買文書の分析を中心として—」『史学雑誌』110(1)、42-69頁、2001年、42-49頁。

²⁷ Borsari, Elisa, “De vino, doncellas y caballeros. Notas acerca de la cortesía en la mesa durante la Edad Media”, *Ibid.*, p. 23.

の批判を見ると、会食の中心は食べることではなく飲むことだったようである。中世におけるワインの普及は明白で、羽目を外したアルコールの摂取が連帯感を生むための祝典で中心的役割を演じた。社会心理学的立場からは、酒を飲む場では日常とは異なるルールが作用し、日常的な規範では許されない行動が飲酒の際には許容されるが²⁸、逸脱を生みやすい。飲酒行動は、普段は理性で抑圧されている攻撃的衝動を表面化させることもあることから、教会は酩酊について警鐘を鳴らし続けた。しかし逸脱に対する教会の非難から、いかにこの種の祝祭がひろく人々に好まれていたかを読み取ることができる。ワインは修道院、女子修道院問わず教団、修道院の中で飲まれ²⁹、コンヴィヴィウムは共同体としての連帯感を強固にした。フランシスコ会のエイヒメニスが14世紀に記した『キリスト教徒第三』(*Terç del Crestià*)では、聖書に基づきワインへの依存は致命的な罪にあたり、心身と道徳の崩壊に警鐘を鳴らしつつも、「ワインの摂取がのどの渇きによるもので、酩酊の効果を認識していれば貪欲にあたらない」としている³⁰。



図2 修道士のワインへの過度の嗜好の批判³¹

²⁸ 石毛直道、前掲書、57頁。

²⁹ Rodrigo-Estevan, M.L., *op.cit.*, p. 105.

³⁰ Rodrigo-Estevan, M.L., *op.cit.*, p. 105.

³¹ Manuscrito iluminado del *Vidal Mayor*, s. XIII, f. 222r y f. 9r. Ed. facs. Huesca, IEA/Diputación, 1989. Citado por Rodrigo-Estevan, M.L., *op.cit.*, p. 107.

中世において聖俗の集団は、等しく共同体の絆を造り、強固にするためにコンヴィヴィウムがいかにか効果的であるかを知り尽くしていた³²。会食はなにかを指示する行為、儀式、ある一定の意味を強制的なものとして明確に伝達するのに役立つ「暗黙の申し合わせ」で、関係から派生する種々の義務に応えようとするすべての参加者の意志を、共通に有していた³³。12世紀頃にはコンヴィヴィウムは構造的な変化にまで発展し、「いっしょに飲む」集団的酌酩は、封建的依存関係の絆よりも、盟友関係を表明するのに適した現象となった³⁴。1412年のカスペの妥結を経てアラゴン王となったフェルナンド1世のために、1414年夏に、フェルナンド1世を支持していたベネディクトゥス13世が断食期間に軽食の会を催した。王とアルカンタラ騎士団長は教皇にワインを注ぎ、トラスタマラ伯とカルドナ伯が王にワインを注ぐ大なる名誉を与えられた³⁵。

「同じ食卓で食べ、同じワインを飲む」という行為は、中世の文化的、象徴的な文脈のなかで、紛れもない親交、友情、和やかな関係、合意を成すものであった。また「一緒に食べ、飲む」ことが目撃されると不義が疑われ、公文書には婚姻が破綻した場合、「共に食べ、飲む」ことをやめることが義務付けられている³⁶。ユダヤ教徒とコンベルソが一緒にワインを飲んだ場合には、異端審問所での処罰から逃れることはできなかった³⁷。

支配階層が徐々に閉鎖的になり、被支配者である民衆が乖離し始めると、食卓は指導者を囲む社会的結合の場ではなく、選別と排除の場となる。遠くから自らの特権を誇示することが新しい権力のイメージとなり、外観、劇場性に支配階層のエネルギーが注がれるようになった。中世の集団生活において、宴は共同体への受け入れ、友好関係を示し、その社会的地位にふさわしく出迎えられ、席を与えられ、贈り物をされて送り出されることは、最も重要でまた争いの要因になりうる儀礼的行為の一つだった³⁸。招待される側はその場に相応しいテーブルマナーと服装で臨まなければならなかった。次に扱う『大人の事情』では、招待客が宴の場に相応しいか厳しい目で見られるシーンに始まり、同じ食卓を囲み、コース料理とワインで話が展開していく。ワインは夕食会での人

³² ジャン＝ルイ・フランドラン、マッシモ・モンタナリー、前掲書、393–394頁。

³³ ジャン＝ルイ・フランドラン、マッシモ・モンタナリー、前掲書、399頁。

³⁴ ジャン＝ルイ・フランドラン、マッシモ・モンタナリー、前掲書、396頁。

³⁵ Rodrigo-Estevan, M.L., *op.cit.*, p. 126.

³⁶ Rodrigo-Estevan, M.L., *op.cit.*, p. 119.

³⁷ Rodrigo-Estevan, M.L., *op.cit.*, p. 120.

³⁸ ノルベルト・エリアス『宮廷社会』法政大学出版局、1981年、160–161頁。

と人のコミュニケーションを促すとともに、酩酊効果により抑圧されてきた本能的衝動が表面化する。酔った人物の日常的な規範から外れた行為により問題が表出し物語が進んでいく。

4. ヨーロッパの宴と「大人の事情」のアダプテーション

宴が催され、コース料理の展開とともに人と人との関係が詳らかとなり、秘密が暴露されデザートで人間関係に決着がつく構造の映画は、前述の作品以外にも1989年の『コックと泥棒、その妻と愛人』³⁹、2017年のアペリティブ、メイン、チーズ、デザート、食後酒へとコース料理が進むにつれて、家族間の未成年犯罪、人種差別、精神疾患、コンプレックスといった秘密がワイン片手に明らかとなっていく『冷たい晚餐』⁴⁰、2022年の超高級フレンチにセレブが集いフルコースを堪能し、コース料理が進んでいくとともにシェフと招待客の秘密が暴露され対立が深まる『ザ・メニュー』⁴¹など、枚挙に暇がない。

なかでも2016年にイタリアで製作された『おとなの事情』⁴²は、2019年7月には最も多くリメイクされた作品としてギネス世界記録に認定されているなど⁴³、ヨーロッパ文化におけるコンヴィヴィウムの普遍的機能が顕著な作品である。「イタリアのアカデミー賞」と言われるダヴィット・ディ・ドナテッロ賞では8部門9つのノミネートを受け、作品賞と脚本賞を受賞するなど国内外で数々の映画賞を受賞し、公開以降、現在のところ30か国でリメイク版が製作されている⁴⁴。リメイクで共通するのは晚餐の夜にかかってきた電話をスピーカーにし、メールの履歴をさらけ出すゲームをきっかけに、それぞれのグレイゾーンが明らかになり、友情や恋愛、社会階層の違いとは何かが明るみになる点である。イタリア版ではイタリアンのフルコースになぞらえて会話が展開されていき、前菜からデザートに向かっていくにつれ、修復不可能な重要な秘密が明かされ

³⁹ Peter Greenaway, *The Cook, the Thief, His Wife & Her Lover*, Elsevier-Vendex Film Beheer, 1989.

⁴⁰ Oren Moverman, *The Dinner*, Orchard Enterprises NY, Inc., 2017.

⁴¹ Mark Mylod, *The Menu*, Searchlight Pictures, 2022.

⁴² Paolo Genovese, *Perfetti sconosciuti*, Medusa Film, 2016.

⁴³ PERFETTI SCONOSCIUTI ENTRA NEL GUINNESS DEI PRIMATI CON IL RECORD DI REMAKE!
https://movieplayer.it/news/perfetti-sconosciuti-guinness-dei-primati-record-remake_69098/ (最終閲覧日2021年1月18日)

⁴⁴ “Récord perfectos desconocidos, la película italiana llega a tener más de 20 remakes” <https://camcig.org/bitacora/record-perfectos-desconocidos-la-pelicula-italiana-llega-a-tener-mas-de-20-remakes/> (最終閲覧日2023年9月13日)

ていく。登場人物は思春期の一人娘のいる医者夫婦である精神科医のエヴァと整形外科医のロッコ、幼い子供がいる倦怠期の夫婦であるカルロッタとレレ、結婚したばかりの新婚夫婦である獣医のビアンカとタクシー運転手のコジモという3組のカップルと元教師で無職の独身男性のペペで、男性四人は幼馴染である。招待主である倦怠期の医者夫婦はかなり前から関係が危機的な状態にあり、それは思春期の娘ソフィアとの衝突につながっている⁴⁵。同じテーブルを囲んでいるからお互い知っていて、対等であるという前提や協調関係が崩れつつ、可能世界も描かれる。

図3 大人の事情のリメイク⁴⁶

	国名	原題	公開年
1	イタリア	Perfetti sconosciuti (大人の事情)	2016
2	ギリシア	Τέλεια Ξένα (完全な他人)	2016
3	スペイン	Perfectos Desconocidos (完全な他人)	2017
4	トルコ	Cebimdeki Yabancı (私のポケットの中の見知らぬもの)	2018
5	インド	Loudspeaker (ラウドスピーカー)	2018
6	フランス・ベルギー	Le Jeu (遊び)	2018
7	韓国	완벽한 타인 (完璧な他人)	2018
8	ハンガリー	BÚÉK (明けましておめでとう)	2018
9	メキシコ	Perfectos Desconocidos (完全な他人)	2018
10	中国	来电狂响 (狂った着信音)	2018
11	ロシア	ромкая связь (大音量の接続)	2019
12	アルメニア	Անհայտ բաժանորդ (見知らぬ闖入者)	2019
13	ポーランド	(Nie)znajomi (決して友達ではない)	2019
14	ドイツ	Das perfekte Geheimnis (完璧な秘密)	2019
15	ベトナム	Tiệc trắng máu (ブラッドムーンパーティー)	2020

⁴⁵ Crítica “Perfectos desconocidos”: Mucho más que una voz en el teléfono (celular), 2018年3月18日、Clarín https://www.clarin.com/espectaculos/teatro/perfectos-desconocidos-voz-telefono-celular_0_BkyVr-n9f.html (最終閲覧日2021年1月18日)

⁴⁶ “Il remake di “Perfetti sconosciuti” bloccato negli Usa per colpa di Weinstein” <https://archivio.giornalettismo.com/remake-perfetti-sconosciuti-bloccato-negli-usa-colpa-weinstein/> [https://en.wikipedia.org/wiki/Perfect_Strangers_\(2016_film\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Perfect_Strangers_(2016_film)) (最終閲覧日2023年9月13日) より作成。現在、スウェーデン、カタール、アメリカ合衆国でもリメイク版が製作中である。

16	日本	おとなの事情 スマホをのぞいたら	2021
17	チェコ・スロバキア	Známí neznámí (既知の未知のもの)	2021
18	ルーマニア	Complet necunoscuți (完全な他人)	2021
19	オランダ	Alles op tafel (テーブルの上の全て)	2021
20	イスラエル	זרים מושלמים (完全な他人／忘れないで)	2021
21	レバノン、エジプト、アラブ首長国連邦	أصحاب ..ولا أعز (親愛なる7人の他人)	2022
22	ノルウェー	Full dekning	2022
23	インドネシア	Perfect Strangers (完全な他人)	2022
24	アゼルバイジャン	Geri Dönənlər	2022
25	アイスランド	Villibráð (ゲーム)	2023
26	デンマーク	不明	2023

物語は月食の日、医者夫婦の晚餐に向かうところから始まる。スペイン版ではブランカが夕食会を「テストみたい」であると愚痴をこぼす。医者夫婦の家に各々手土産を持って訪れる。倦怠期夫婦は買ったものではない手作りのティラミス、新婚夫婦はビオワインを持ってくる。映画のなかでワインのステータスは重要で、ワイン談義にかなりの時間が割かれるが、ビオワインは無添加を売りにしたワインで一般的に「高い割にまずい」とされあまり歓迎されない。イタリア、フランス、スペイン版ではビオワインをお土産に持ってきて、陰口をたたかれる。スペイン版では若い新入りのブランカがビオワインを持参し、赤ワインにもかかわらず「冷やさない」と評され、注ごうとすると「一滴でいい」と敬遠される。そして独身のペペが持ってきた、Marquésと貴族の名を冠した2本の赤ワインのレセルバは相応しい手土産として歓迎される。

アペリティブとして全員の到着を待ちながら、キッチンでワインを飲みつつ、他愛もない世間話や噂話が交わされる。ここで共通の知人が23歳の女との浮気のメールをきっかけに家庭が崩壊したことが話題となったことから、一同は席につき食事が始まると、会話の中でエヴァが互いのスマホを卓上に置いて公開するというゲームを提案する。秘密がなければ問題ないはずということで最初は否定的だった男性陣も渋々ゲームに参加することになる。コースの前菜で、レレは浮気がばれないようにペペのスマホと自分のスマホを交換する。食事が再開すると次々とスマホに通知が届き、ペペと交換したレレのスマホに女性から誘いのメールが来たり、カルロッタがレレに秘密で姑を老人ホームに入れよ

うとしていることが露見したりしてしまう。メインの肉料理が供されるとともにさらに大きな秘密が露見していく。ペペは携帯を交換したレレ越しに同性愛者であることをカミングアウトした時の周りの反応と偏見に直面し、コジモは浮気相手を妊娠させていたことがばれてしまう。ショックからトイレに籠ったビアンカに付き添うため一同その場を後にする。月食が終わると、各国リメイク版でそれぞれ異なる展開や結末を見せる。

韓国版『完璧な他人』はオリジナルに忠実に描かれており、フランス版と同様男性4人が3年生から友達という設定は同じで幼馴染の連帯感が強固である。社会階層はワインを飲む人/ビールを飲む人/マッコリ・焼酎を飲む人として上下が明確に分類されている。医者夫婦の妻イエジンの講演会に大卒の新婚夫婦の妻は招待されたが、専業主婦である倦怠期夫婦の妻スヒョンは招待されなかった会話のくだりでは、イエジンの目の前にはワイン、スヒョンの前には焼酎が置かれている。この一連の会話からは韓国における収入格差と学歴格差がアルコール飲料の種類によって明示されている。新婚夫婦が持ってきた中国製のフクロウの飾り物について陰口を言ったり、家の中を見せて回ったりするシーンもあったりと、招待する側と招待客との間の格差が至る所で鋭く描かれている。供される料理に韓国家庭料理が織り込まれるなど、韓国版はコース料理を自国の食文化にうまく落とし込んでおり、フランス版に近いレバノン版もイタリア版を忠実に踏襲し、中東のパリといわれているだけありワインを盛んに飲みながら、ムルキアというエジプト料理、ウサギ肉が中心に多国籍料理が供されている。

日本版では7人ものが座る大きな円卓でワインを飲むという主催者のブルジョアの雰囲気だけは共通するものの、饗宴ではなくポットラックパーティーで、普通の民家でゲームを始める設定となっている。倦怠期夫婦の手土産が貰い物の使い回しだったり、医者夫婦の一軒家のシーンのあとに倦怠期夫婦が団地の狭い部屋に住んでいるシーンを挟んだり、コンビニアイスの手土産など映像の端々から経済格差が読み取れるものの階層差は明確ではない。日本版は他の地域のリメイク版と比べて、ワインと宴の社会的文化的機能に則っておらず、ビールで乾杯し、コース料理とストーリー展開のリンクはなく、前菜の段階で煮込み料理が出され、料理が取りざたされることもなくタッパーで持ち寄ったものを食べる。文化の違いからかオリジナルのフォーマットが日本では使いこなされておらず、ここではワインも晩餐も重要ではない。

5. おわりに

ヨーロッパでは集団生活のなかでコンヴィヴィウムが核心的な役割を果たし、同じ食卓を囲む人間が平和と協調の上に立った関係であることを示した。会食は新たな絆の創り、旧来からの絆を確認した。中世以降コース料理で進められる宴はコミュニケーションの場であることに加え、社会的ステータスの連関が強まり、主催者は趣向を凝らして食事をする場を準備し、招待客は相応しい土産を携え、テーブルマナーと服装でもって共同体に受け入れられることが認められ、友好関係を示した。ワインによる飲酒文化が成熟しているヨーロッパにおいて、「同じ食卓で食べ、同じワインを飲む」という行為は、中世の文化的、象徴的な文脈のなかで、紛れもない親交、友情、和やかな関係、合意を成すものであった。宴での飲酒行動は友情を深め、連帯を強化し、社会的孤立を解消するなどの社会的効果をもつことから、祝祭に随伴した。他方で普段は理性で抑圧されている攻撃的衝動を表面化させることもあり、教会は酩酊による逸脱を非難し続けた。ワインを中心とした饗宴における融和と酩酊による逸脱もまたヨーロッパにおいて通時代的な認識である。

欧米圏では宴においてワインを片手にコース料理の進行とリンクしてストーリーが展開する饗宴映画が多く製作されているが、『大人の事情』の夥しいリメイクはとりわけコンヴィヴィウムとワインの文化の翻訳の可能性を明示している。宴は友好関係を示す儀礼的行為であると同時に、相応しくない行為は争いの要因にもなりかねず、アルコールによる緩和とともに逸脱や緊張、争いも生じやすい場である。このようなコンヴィヴィウムにおけるアルコールの効果は、飲酒文化のある文化圏では共通の認識であるにもかかわらず、日本版ではなぜディテールの捉え方がずれてくるのだろうか。脚本家が「(オリジナルを) リスペクトしつつも、闘いを挑むつもりで取り組みました」⁴⁷としていることから、製作側が日本にはなじまない文化であると認識しているのかなど考える余地がある。日本の居酒屋文化ではビールが中心であり、ビールはワインほど知識が必要ではない。また嗜好品である日本酒や茶への知識は広く共有されているとはいいがたい。日本版の翻訳の歪みには日本の飲酒文化のありようが含意されており、東西の飲酒文化の接点と変容も射程に収めた、酒宴文化の有無や差異について汲み取ることができよう。

⁴⁷ 「[おとなの事情] 日本版で東山紀之がモテない独身男性に、脚本は岡田恵和」 <https://natalie.mu/eiga/news/385909> (最終閲覧日2023年9月11日)